

1、背景とねらい

近年の肉用牛の肥育経営は、素牛高の影響から非常に厳しい経営環境におかれてきている。以前にも何度か同じケースがあった割には効果的な対応策が検討されていない現状にある。そこで今回は、素牛高を背景に将来予測を加味した肥育経営のあり方について検討したので参考に供したい。

2、技術内容

(1) 素牛高騰時の収益性の見直し

ア、収益性

肥育頭数規模別の収益性は、30頭規模で1頭当り17,916円、100頭規模で5,793円の所得が見込まれるが、50頭規模では4,913円の赤字となる。大規模経営では規模の経済（有利性）が成立しにくい厳しさがある。

イ、自己資本比率に対する所得発生限界

自己資本の有・無によって所得の発生限界値が異なり下表のような結果となるので、特に自己資本の少ない経営の場合には細心の注意をはらう必要がある。

頭数規模		30頭		50頭		100頭	
自己資本比率(%)		0	50	0	50	0	50
所限 得界	濃厚飼料単価(円)	39<	48<	30	38	34	43
	枝肉単価(円)	1,979>	1,931>	2,080	1,998	2,012	1,960
発 生	流動資本金利率(%)	7.2<	13.6<	1.1	6.2	3.9	9.2
	素牛価格(千円)	448<	478<	419	443	432	458

(2) 対応策

ア、当面の対策

資金の調達にあたっては、固定負債の後追い対策にならないよう徹底した経営管理のもとに次のような措置を講じていく必要がある。

- (7) 各種制度資金利用による運転資金、素畜導入経費の支払時期の延長を図る。
- (イ) 素牛、エサを含めた流動資本金利率は5%以下の低利にする必要がある。
- (ウ) 技術面では、増体系を増し肥育期間の回転を早める等、従来の肥育方法にこだわらずどの形態が経営上最も有利か検討し、改善努力をする必要がある。

イ、長期対策

- (7) ビーフサイクルの平均的な収益性の検討から、長期平均払い制度の導入による安定経営の確立を図る必要がある。
- (イ) 最低限必要な自己資本比率は20%、できればそれ以上確保する必要がある。

3、指導上の留意点

- (1) 年に1回以上は棚卸しをし、常に借入金と照合した経営管理が大切である。
- (2) 参考事項、「肥育素牛の適正購入価格の指針」（57年）「パソコンによる肥育牛収益シミュレーション」（58年）等を参照されたい。
- (3) 素牛導入にあたっては、この指標を参考にして、技術水準、経営内容に適合した素牛を導入するなどきめ細かい技術対応が必要である。

4、参考文献

- (1) 財務分析入門（銀行研修社）
- (2) 副産分岐点活用法（同友会）

